

# 留学生と日本人学生のための チューター制度の試験的導入とその効果

濱田 龍之介 根本 直弥 山崎 瑞紀

本研究では、留学生と日本人学生が1対1で交流するチューター制度を試験的に実施し、参加者へのインタビューや質問紙調査の結果をもとに、効果を検討した。結果として、留学生のチューター制度への満足度は高く、留学生、日本人学生とも互いの交流や異文化理解に関して肯定的な評価をしており、互いにイメージが良くなったと回答する傾向があった。一方で、「スケジュール調整の難しさ」や「チューター制度の目標の不明確さ」といった問題も見出された。交流をより活性化するための話題集の作成やSNSの活用など、今後の改善策を具体的に提案した。

キーワード：チューター制度、留学生、異文化交流、異文化理解

## 1 はじめに

留学生支援のためのシステムとして国立大学を中心とした多くの大学で採用されているのがチューター制度である。[2]によると、国立の高等教育機関において1972年度に国費留学生を対象に発足し、1976年には私費留学生にも適用されるようになった。留学生向けのチューター制度では、留学生に対し日本人学生が1対1で大学での勉強・研究・日常生活などを支援する。一般にチューターには謝金が支給される。現在は国立大学法人に限らず、チューター制度を導入している公私立大学もある。他大学のチューター制度の成果や問題点について報告された論文には、[2]の長崎大学の会話パートナープログラム、[1]の北九州市立大学のチューター制度、[3]の高知大学のチューター制度の報告などがある。これら3つを比較しただけでも、制度の目的、大学の専門や留学生の受け入れ状況などにより、チューター制度の形が大学ごとに様々であることが分かる。

東京都市大学の環境情報学部では、授業時や昼食時でも留学生同士で集まる様子が同え、留学生と日本人学生の交流が消極的であるように感じた。そこで、本学部にてチューター制度を実施することで留学生と日本人学生の交流の場を提供でき、この問題を解決できるのではな

いかと考えた。今回試験的に行うチューター制度では日本人学生は学部生であり、院生に比べると専門指導に自信が持てないと考えられる。加えて、日本人学生に謝金が支払われないため、留学生だけでなく日本人学生も満足できる制度設計にする必要がある。そこで、今回のチューター制度の目的は、留学生の大学生活に関するサポート提供のほか、留学生と日本人学生の異文化理解を高めること、両者の交流を促進すること、とする。

本研究では、チューター制度未導入の本学でチューター制度を試験的に実施し、参加者へのインタビューや質問紙への回答結果をもとに、チューター制度への参加による効果を検討するとともに、本学部にとって理想的なチューター制度について考察する。

## 2 方法

**実施時期** 2011年10月中旬～12月中旬。10月17日(月)の週から始め、12月12日(月)の週で終わりとし、最大8回のセッションが期待された(文化祭があった週は休みとした)。

**参加者** 東京都市大学環境情報学部1年生の留学生8名(男性2名、女性6名、平均年齢23.0歳)と東京都市大学環境情報学部3年生の日本人学生8名(男性8名、平均年齢21.1歳)の計16名。留学生の出身国内訳は中国5名、韓国2名、ベトナム1名。留学生は、講義の受講生を教員に紹介してもらうか、知り合いの留学生から紹介してもらった。日本人学生は、同じ研究室の学生に呼びかけて参加を募った。

**手続き** まず、チューター制度参加者の留学生に事前インタビューを行ってチューター制度への要望を把握し、その結果を基にチューター制度の構想を練った。続いて、

HAMADA Ryunosuke

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科2011年度卒業生

NEMOTO Naoya

東京都市大学大学院環境情報学研究科2年生

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科准教授

参加者全員にマッチング用のアンケートに回答してもらい、その結果を基にペア決めをした。初回時のみ著者が各ペアの仲介をし、チューター制度の規則（週に1度は40分以上交流するなど）を説明した。それ以降いつどこに集まるのか、各回でどのようなことをするかは各ペアごとに話し合っ決めてさせた。参加者には毎週チェックシート（毎行行った内容とその感想を書く報告書）を記入して提出することを義務づけ、その内容をもとに各ペアのチューター制度の進行具合を把握した。また、中盤にあたる11月中旬には参加者一人ずつに中間インタビューを行い、各ペアのチューター制度の進行具合と問題点を把握して後半の調整に役立てた。最終回を終えた時点で参加者一人ずつに最終インタビュー及び質問紙調査を実施し、チューター制度を終了した。

**事後アンケート項目** チューター制度の満足度1項目（「チューター制度に満足した」）、日本人学生のイメージ1項目（「日本人学生のイメージが良くなった」）、交流1項目（「パートナーと仲良くなれた」）、異文化理解2項目（「異文化理解が深まった」、「異文化理解への意欲が高まった」）、有益度3項目（「日本語力の向上に役立った」、「授業のサポートに役立った」、「大学生活において有益な情報が得られた」）の計8項目について5件法で尋ねた。日本人学生には、留学生のイメージを尋ねるとともに、「日本語力の向上」、「授業のサポート」項目の代わりに「留学生と話をして楽しかった」、「自文化への関心が高まった」の2項目を設定した（表1参照）。

### 3 結果

#### 3.1 留学生について

留学生における各項目の平均と標準偏差を表1に示す。表1には日本人学生の結果も示されている。留学生においては、「チューター制度の満足度」で高い値がみられている。インタビューで「来年もチューター制度があったら参加したいか」と尋ねたところ、7名中6名が来年も参加したいと回答していることから、留学生達は今回のチューター制度に概ね満足していたと考えられる。なかでも「異文化理解」の項目で平均が特に高いことが分かる。インタビューにおいても、チューター制度に参加して良かった点として「日本の文化を知ることができたこと」を7名全員が挙げていた。具体的には、日本の歴史、行事、世界遺産、観光地などについてパートナーから教えてもらった、あるいは日常会話の中から母国との風習の違いに気付けた、ということだった。

次に平均が高いのは、「パートナーとの交流」、「日本人学生のイメージ」、「日本語力の向上」の項目である。インタビューにおいて、「日本人の友達ができ、日本人の知り合いが増えたことが良かった」という意見を7名中5名から聞いた。特に、普段の生活ではあまり接点のない大学の先輩と繋がりを持つことができ、授業や就職活動、研究室に関する話が聞けて参考になったという意見が多かった。パートナーの印象については日本人学生のそれぞれの性格によって異なったようだが、日本人学生が熱心に物事を教えてくれる様子に好感を持った留学生は多かった。中には、高校時代の古文や歴史の教科書を用いたり、自分で調べた情報をプリントにまとめてきて日本のことを教えたりする日本人学生もいた。2か月に渡る交流を通して、留学生は日本人学生の良さを直接感じ取ったようで、それが結果として日本人のイメージアップに繋がったと考えられる。今回、留学生への日本語

表1 各項目の平均と標準偏差

項目内容	留学生		日本人学生	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1) チューター制度に満足した	3.86	0.38	3.29	1.11
2) パートナーと仲良くなれた	3.71	0.49	4.57	0.79
3) 異文化理解が深まった	4.14	0.69	3.57	1.13
4) 異文化理解の意欲が高まった	3.86	0.90	4.00	1.41
5) 大学生活において有益な情報が得られた	3.57	1.27	3.00	0.58
6) 日本人学生のイメージが良くなった	3.71	0.49	-	-
7) 日本語力の向上に役立った	3.71	0.76	-	-
8) 授業のサポートに役立った	3.43	1.40	-	-
9) 留学生のイメージが良くなった	-	-	4.71	0.76
10) 留学生と話をして楽しかった	-	-	4.57	0.79
11) 自文化への関心が高まった	-	-	3.14	1.35

の指導として特に教材を用意できたわけではないが、日本人と話す機会ができたことで日本語を使う機会が増え、それが日本語力の向上に役立ったと留学生は感じたようである。

授業のサポートとしての評価が他の項目と比べて低い理由としては、今回のチューター制度は留学生と日本人学生の交流の活性化を主な目的としており、勉強の支援を必須とはしなかったことが要因と考えられる。また、双方の学科が異なったため、日本人学生にとっても指導が困難な状況だったと思われる。ただ、授業のサポートを要望していた留学生に対しては勉学に真面目で他学科に知り合いの多い日本人学生をあてたため、留学生にとっても満足のいくサポートが行われたようで高い評価を得ることができた。

インタビューにより、留学生から挙げた今回のチューター制度の問題点は、「スケジュール調整の難しさ」と「チューター制度の目標の不明確さ」である。前者については、空き時間の合う者同士をマッチングするように工夫を施し、昼休みの時間の交流も了承したためある程度は調整がきくと思われたが、7名中5名からこうした不満の声が挙げた。学生達は空き時間や昼休みを課題の時間や同学年の仲間との交流にあてたりするため、チューター制度を優先させて日々のスケジュールを組むのは思った以上に難しいようである。解決策としては、留学生の予定に合わせられる日本人学生を集めるようにするか、あるいは参加者達が参加したいと思ったときに気軽に参加できるような柔軟なシステムにチューター制度を変える必要がある。

チューター制度の問題点の后者については、留学生と日本人学生の交流の活性化という大きな目標がありながらも、毎回行う内容については参加者達の自主性に頼りすぎたことが要因と考えられる。最初の数回は話したい話題があっても、後半になるにつれてパートナーに対して聞きたいことが薄れる、あるいは何を聞いていいのかわからなくなるようだ。親睦を深めるためには日常会話をするだけでも十分だと思うが、留学生達にとってはそれだけではチューター制度に参加する意義を感じ取りにくいようである。チューター制度でより充実した時間を過ごしてもらうには、各回で留学生と日本人学生の双方が目的意識を持ち、聞きたい内容を事前に準備しておくことが望ましい。しかし、それだけでは負担が大きいため、各回のテーマを提示したり、チューター制度用の話題集を作るなど、運営側が話題の材料を用意する必要がある。

### 3.2 日本人学生について

日本人学生では、留学生のイメージや交流に関する項目の平均が最も高かった。インタビューにおいても、チ

ューター制度に参加して良かった点として、「留学生と話ができたこと、仲良くなれたこと」を7名全員が挙げ、7名中4名が「留学生は思っていた以上に話しやすかった」と話していた。中には、チューター制度の時間外でも話すほど親しくなり、チューター制度の必要性がなくなったという学生もいた。「留学生」と聞くとどうしても「外国人」という考えが先行し、「日本語が通じないのではないか」、「話が合わないのではないか」、「日本に偏見を持っているのではないか」など、留学生との交流に日本人学生は不安を抱きやすいのかもしれない。しかしながら、一般に留学生は大学入学前に日本語学校で1、2年間日本語の勉強をしており、日常会話での意思疎通をほぼ問題なく行える。日本人学生は留学生との交流を通して、留学生への接しやすさに気付くことができ、結果として印象が良い方向に変化したと考えられる。インタビューの中では、「チューター制度に参加する前は、留学生は日本人に対して否定的なイメージを抱いているのでは、という偏見があったが、実際に話をして仲良くなるにつれて、その考えも払拭された」と話す日本人学生もいた。

異文化理解に関する項目の値も比較的高いといえる。インタビューでも、7名中5名が「外国の文化を知ることができたこと」をチューター制度に参加して良かった点として挙げた。特に、留学生の母国の文化や価値観、留学生が体験した日本での苦労話などに日本人学生は興味を持ったようである。今回の調査結果をみると、日本人学生全員に自文化への気づきがあったとは言い難い。しかしながら、インタビューで「留学生からの視点で日本を知ることができた」、「自分が日本について知識不足であることに気付かされた」と話す学生もいた。

満足度に関しては、留学生ほどの高い満足度は得られなかった。「留学生と親しくなれた」、「留学生の役に立てた」ことを理由に満足する者もいる一方で、「留学生とスケジュールが合わなくて十分な交流ができなかった」、「チューター制度の目標が不明確で、何をもちて達成と言っているのかわからない」、「自分の知識不足のせいで十分なサポートが行えなかった」などと話す者もいた。今回チューター制度は初めての試みということもあり、日本人学生の手応えもまずまずだったようだが、7名中5名は次回もあれば参加したいと回答していた。

### 3.3 全体について

留学生、日本人学生とも、チューター制度により異文化理解や互いの交流が促進されたと回答しており、自己評定という限界はあるものの、本研究の目的であった「留学生と日本人学生の異文化理解を高めること」、「両者の交流促進」はうまくいったといえるだろう。

日本人学生の方が留学生よりも、「パートナーと仲良く

なった」, 「留学生 (日本人学生) のイメージが良くなった」と回答していた理由としては, 日本人学生の場合は交流する留学生に限られるために, 1人の留学生との接触が留学生全体のイメージに影響を及ぼしやすいのに対し, 留学生の場合には周りに日本人学生が多くいるため, 1人の日本人学生との接触が日本人学生全体のイメージに与える影響は小さいことが考えられる。仲良くなったことへの認知の違いは, 約束の時間を守らない日本人学生がいたことのほかにも, 友人関係のあり方の文化による違いも考えられる。

#### 4 今後のチューター制度のあり方

今回の試みでの一番の問題点は, 「スケジュール調整の困難さ」であった。特に, 会う直前にチューター制度の予定をキャンセルする日本人学生が多く目立ち, これが原因で一組は途中で中止になった。問題があったのはこのペアだけでなく, 事後インタビューの中でも, 「日本人は約束や規則を守ると思っていたのに, 守らない日本人が多いと感じた」と話す留学生もいた。チューター制度に参加する日本人学生が無責任な行動をとってしまうと, 留学生の中でそれが「日本人」のイメージとして定着してしまう恐れもある。これからチューター制度に参加する日本人学生には, 日本人として責任を持って取り組んで欲しい。このスケジュール調整の困難さの解決策も含めて, 今回のチューター制度の結果をもとにシステムの改善策を提案する。

##### 4.1 日本人学生の適性, 及び募集方法

今回のチューター制度では, 留学生と年齢が近く, 学生生活にも詳しい上級学年の日本人学生がペアとして適切であると考えられた。しかし, 上級学年の日本人学生と下級学年の留学生では学校に来る頻度が異なるため, スケジュールを合わせにくいということが分かった。1年生の場合, 毎日授業があるため大学にはいるものの, 講義が詰まっている上, 空き時間を課題の時間に充てることが多いようである。チューター制度のための時間の確保が難しい。一方, 1年生に比べると履修科目数の少ない上級学年だが, 大学に来る曜日も滞在する時間も限られていることが多く, スケジュール上は空き時間があっても大学にいないことが多い。そうした点を踏まえると, 日本人学生は留学生と同学年の方がスケジュールは合わせやすいといえるだろう。「同学年の日本人学生となら, 授業内で十分仲良くなれる」という留学生の意見もあったが, 全員と仲が良いというわけではないため, 新たな日本人学生と接点を持つ良い機会になるのではないかと思う。上級学年に比べて大学生活の知識は劣るかもしれないが, 授業に関する話もしやすく, チューター制度の時間を共に課題を行う時間として充てることもできる。ま

た, 日本人学生も1, 2年生のうちに留学生の友人ができれば, 第2外国語の勉強意欲も増すだろう。更に, 1, 2年生のうちに日本人学生にチューター制度を経験させれば, 1年後2年後にもリピーターとして参加してくれる可能性があり, そのようなチューター制度の経験豊かな学生が集まれば本学のチューター制度の質も高まっていくと考えられる。

日本人学生の適性としては, チューター制度は限られた時間で行うものであるため, 少なくとも「時間を厳守できる人」が望ましい。また, チューター制度を一人でも多くの学生に認知してもらうためにも, 日本人学生の募集は広範囲に行うべきだろう。

##### 4.2 SNSの活用

事後インタビューでは, 「もっとSNSを活用した方がいい」という意見が挙がった。SNSとは, Twitter, mixi, Facebookのようなインターネット上のコミュニケーションサイトのことである。SNSを採り入れる利点は, 「勉強とバイトの両立で多忙な留学生ともチューター制度時間外に交流できること」, 「他のペアの人達との意見交換の場として使えること」である。本学部は環境情報学部というパソコン専攻の学部であり, これらの操作に精通している日本人学生は多い。一方で, 留学生には日本のSNSがあまり浸透していないことがインタビューで明らかになった。そこで, 次回からはチューター制度の説明時にこれらの使い方を教える, または, チューター制度の初期段階のテーマとして「SNSの指導」を採り入れると良いだろう。今回は中間インタビュー後に参加者の意見交換の場としてWeb上に掲示板を設置したが, 導入が遅れたためか掲示板では活発な意見交換が行われなかった。学生にとって身近なSNSを用いることで, Web上での交流も活発に行われると考えられる。

##### 4.3 ガイドブックの作成

今回のチューター制度の目的は, 「留学生の大学生活に関するサポート提供のほか, 留学生と日本人学生の異文化理解を高めること, 両者の交流を促進すること」であった。このような目的の場合, 他大学のような勉強支援と比較すると, 明確な目標は立てづらい。今回の試みでは, 初回時にペアごとにチューター制度の目標を立てチェックシートに記入したが, 「お互いの文化を知る」, 「パートナーと仲良くなる」といった抽象的な目標が目立った。それ故に, 「チューター制度の時間に何をすればいいのか」, 「具体的にどのようなサポートをすればいいのか」が分からないという学生が多かったように思われる。そのため, 「チューター制度のルール」, 「参加者心得」, 「過去のチューター制度で行われた内容や話題例」, 「トラブルを回避するためのQ&A形式の「トラブルシューティング

グ), チューター制度の活動時に役立つような「お勧めの書籍やWeb サイト」などを記したチューター制度のためのガイドブックを作成し, ガイダンス実施時に配布するといいたいだろう。

「過去のチューター制度で行われた内容や話題例」を示すことで, 今回の問題点の一つであった「チューター制度の内容の不明確さ」を解消できる。これでも不十分な場合は, 週ごとの目標や話題を運営側が定める方法もある。「参加者心得」については, 学習支援の方法についても記すとよいだろう。学習支援と聞くと, 多くの学生が「家庭教師のように自力で勉強を教えなければならない」と思いがちであるが, 役に立ちそうな本やウェブサイトを紹介するといった情報提供の形もありうる。チューター制度内で言語交換を行うことも考えられるため, そのような場合は運営側が適切な教材を準備又は紹介できることが望ましい。

「チューター制度のルール」についてもいくつか改善案がある。今回の試みでは学内での活動に限られたが, 今後は学外での活動も採り入れてもいいかもしれない。インタビューの中でも「日本人学生が普段しているような遊びに加わってみたい」「旅行してみたい」という留学生からの意見があった。

#### 4. 4 チュータリングルームの設置

3. 1でも述べた「参加者達が参加したいと思ったときに気軽に参加できるような柔軟なシステム」についてであるが, チュータリングルーム(チューター制度参加者達が気軽に集まることのできる待合室)を設けるといい。このような部屋を設けることで, 時間の空いている人同士が容易に交流できるようになる。今回の試みでは食事会というイベントを催したが, 昼休みは食堂が混み合うため10名以上の席を確保することが容易ではなかった。チューター制度の運営側がここに待機することで, 相談室としての役割も果たせるだろう。

### 5 むすび

本学部におけるチューター制度はまだ始まったばかりであり, 他大学のように回数を重ねて試行錯誤していく必要がある。今回の試みとしては, 「留学生と日本人学生の異文化理解を高めること」, 「両者の交流促進」の効果は得られたと考えられる。今後は, 大学生活に関するサポートを提供するための工夫とともに, 本学の学生達にどのようにチューター制度を広めるかということも課題となるだろう。

今日では, 国際化として海外に行くことや英語を学ぶことばかりが注目されるが, 本当の意味での国際化とは多文化共生社会の認識であると考えられる。異なる文化を背景に持つ人々と共存していくためには, 互いの文化の違

いに気づき, 認め合うことが重要である。今回の試みをきっかけとして, 留学生と日本人学生の双方に良い影響をもたらすようなチューター制度が本学部に定着するように今後の発展に期待したい。

### 参考文献

- [1] 小林浩明: “チューター制度の改善と留学生アドバイザーング”, 北九州市立大学国際論集, 5, p53-62, 2007
- [2] 松本久美子: “会話パートナープログラム –留学生と日本人学生の相互理解に向けて–”, 広島大学留学生センター紀要, 11, p79-93, 2001
- [3] 大塚薫: “高知大学におけるチューター制度の現状及び課題”, 高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要, 4, p121-138, 2010